

陸上競技におけるマスターズ競技者の競技参加理由についての研究

Reasons of Participation in Masters' Track and Field

1K10C353-0 廣 真里奈

主査 松岡 宏高 先生 副査 礒 繁雄 先生

【研究の背景と目的】

現在、日本は超高齢化社会をむかえており、高齢者のスポーツ実施の必要性が唱えられている。文部科学省の調査によると、週 1 日以上スポーツを実施する成人の割合は 30 年前と比べて約 15%上昇している。そんな中、競技を楽しみたい人なら誰でも参加ができる性格をもつマスターズスポーツの発展がみられ、様々なマスターズの競技会が開催されている。マスターズ競技の中でも陸上競技は単体で大会が開催されている。しかしながら、成人の陸上競技実施率は極めて低いという現状がある。中高年者にとって多くのメリットを持つ陸上競技の実施率を上げることは、中高年者スポーツの更なる充実につながると考えられる。そのためには、競技実施決定に関わる重要な情報になるであろう、競技参加者の特性を明らかにする必要がある。

そこで本研究では、他要因との関係性も交えながら陸上競技におけるマスターズ大会参加者の競技参加特性を明らかにすることを目的とする。

【研究の方法】

2013 年 10 月 14 日に正田醤油スタジアム群馬にて開催された第 12 回群馬マスターズクラブ対抗陸上競技大会への大会参加者を対象に、質問紙による調査を行った。回収数は 154 部であった。

マスターズ陸上の参加動機に関して、山本（1990）が提案した運動部参加動機の構成因子を参考に、マスターズ陸上に適した新たな参加動機項目も加えて、7 因子 12 項目を設定した。それぞれを「1：全くあてはまらない」から「5：非常にあてはまる」までの 5 段階尺度で測定した。さらに、性別や年齢、過去の競技経験や普段の練習状況を尋ねる項目も質問紙に含めた。

【結果】

マスターズ陸上の競技参加理由については、表 1 で示されているように「自由・平等性(M=4.34)」の因子が最も高い値を示した。続いて「愛着 (M=4.31)」、「親和 (M=4.13)」、「健康・体力 (M=4.11)」、「達成(M=3.75)」、「競技特性(M=3.71)」、「環境(M=3.22)」という結果であった。また、各因子間の相関関係を確認したところ、自由・平等性と健康・体力の間、愛着と達成の間で、他の項目間に比べて、高い正の相関が認められた。

競技参加理由と他要因との関係性について分析を行

ったところ、性別や年齢は競技参加理由に影響を与える要因ではないことがわかった。過去の競技経験と参加理由の間では、愛着の項目において競技経験ありの者の値が高いという結果が出た。また、競技実施時期や競技レベルが、現在の競技参加理由に影響を与えていることも明らかになった。県外大会への出場経験との関係では、出場経験の有無で達成、親和、競技特性の項目において平均値に差が生じることがわかった。また、練習時間においては達成と環境、練習頻度においては達成、健康・体力、自由・平等性の項目で関係性があることがわかった。

表 1：競技参加理由の平均値

動機因子	項目	平均値
達成 (3.75)	他者との競争に勝ちたいから	3.40
	記録を向上させたいから	4.05
健康・体力 (4.11)	健康・体力の維持・増進ができるから	4.33
	体型維持ができるから	3.89
親和 (4.13)	試合を通して多くの人に出会えるから	4.13
自由・平等性 (4.34)	1 人でも気軽に取り組めるから	4.34
愛着 (4.31)	陸上競技が好きだから	4.35
	試合に参加することが楽しいから	4.26
環境 (3.22)	一緒に練習する仲間がいるから	3.16
	周囲の練習環境が整っているから	3.26
競技特性 (3.71)	年齢毎にクラス分けがされているから	4.01
	年齢毎に距離や道具の規格が異なるから	3.42

【考察】

陸上競技への参加理由は、一人で気楽に取り組むことができるという個人種目特有の特徴が大きく関与しており、周囲の環境に左右されずに自分のペースで競技に取り組んでいる人が多いことが考えられる。また、普段の練習状況と競技参加理由の関係性を見たところ、競技者は各々の目的に応じて、練習に取り組んでいるということが考えられる。

ここから、マスターズ陸上の競技参加には、勝ちたい、記録を出したいといった競技性の強さではなく、自分のニーズに応じて競技に取り組むことのできる自由度の高さが大きな要因となっていることがいえる。

本研究から、マスターズ陸上の実施率上昇のためには、競技参加の理由として、マスターズ陸上が競争重視ではなく、自分のペースで気軽に取り組むことのできる競技であることをより多くの人に知ってもらう必要があることが示された。